

サステナブルシティを訪ねて

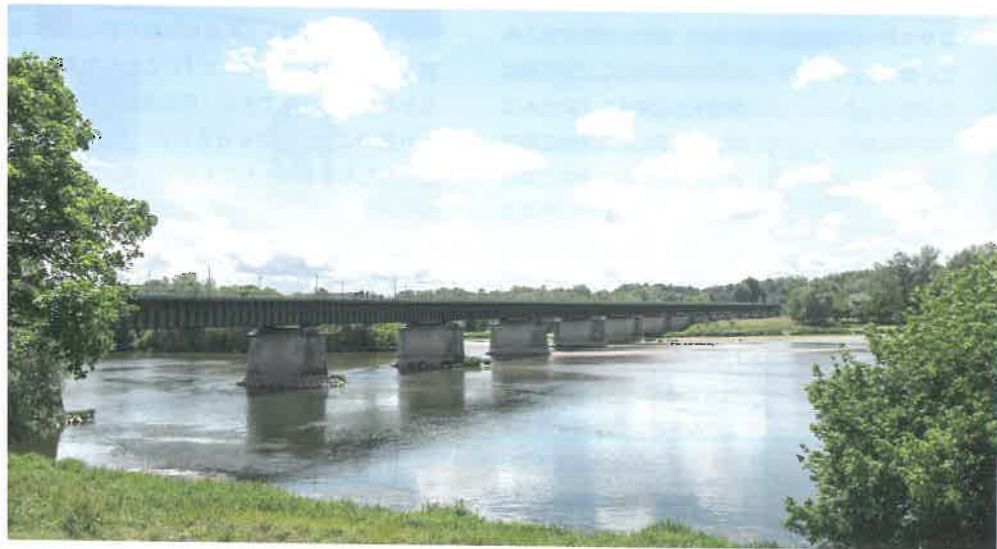
Briare



舟を渡る船、モザイクのある街

リアル運河は、フランスで最も古い運河の一つと
われている。ヨーロッパで最初の山越え運河でとも
われ、ロワール河とセーヌ河をつないでいる。1604年、
時の食糧不足解決のため、穀物輸送を發展させるべく、
ユリー公爵マクシミリアン・ドゥ・ペチュヌにより建設
開始。アンリ4世の支持を受け、1642年に完了した。
ワール河にブリアール水道橋がかけられたのは、
90年から1896年にかけて。エッフェル技師の協力
によって建設された。ヨーロッパ最長(663メートル)
運河橋であり、貨物運搬船も、プレジャー・ボート
度ることができる。ロワール左岸の「ロワールと並行

の運河」トブリアール運河を結んでいる。
橋まではすぐわかった。自転車に乗った観光客が結構
な数、集まっているから。確かに絶景だ。
橋の真ん中に河が流れ、両サイドの歩道をゆっくりと人
が行き交い、色とりどりのサイクリストたちが息を休め、
河を見下ろしている。見たこともない風景だ。眼下には
野趣あふれるロワール河が流れている。その両脇の河
川敷にも緑の道と、ベンチが見える。歩いたらきっと
気持ちが良いだろうと思う。見上げれば、橋を渡る船
という珍景も見られるのだ。頻りに船が通るわけでは
ないらしいので、橋のふもとの一軒家で一休みする。
よくある観光地のカフェかと思いきや、本格的なショコ
ラティエ。隣の家族がおいしそうに食べているチョコレー



トパフェは、入れ物もチョコレート。嬉しくなって人の
良さそうなおじさんウエイターに注文する。本当におい
しい。ちゃんに入れ物までおいしい。これなら、フード
ロスもないし、食器を洗う水もエネルギーも削減できる。
世界中の器が全部、チョコレートなら良いのに、一瞬
考えてしまった。
おじさんが「来たよ!」と教えてくれたので、急いで橋
に戻る。レジャーボートがゆっくりと橋を渡っている。
青空のなかを、街路樹の真んなかを、人々の笑顔に見
送られながら。少し坂をおりて、下からも見上げてみる。
ちゃんと橋の上を渡っている。なんとという穏やかな風景。
今はもう、穀物もワインも運ばないけれど、代わりにお
だやかな心持ちのようなものを、運んでいるのだろう。

博物館でサステナビリティを

ブリアールをブリアールたらしめるもう一つの象徴、
モザイク博物館に行く。ミュゼ・デゼモー・エ・ドゥ・
ラ・モザイク・ドゥ・ブリアール。確か駅の近くだ。
歩きながら気にしてみると、いたるところにモザイク
がある。駅にもモザイク。看板や壁、表札。小ざれい
で上品なモザイクの街。モザイク博物館に入ると、モ
ザイクだけでなく、ブリアールの歴史そのものが時に
華やかに、時に質実に語られていることに気づく。一
人の企業家との出会いが、その街の運命を良い方向に
導き、やがて産業や時代の移り変わりが、小さなボタ
ンの掛け違えを重ね、穏やかな衰退を生み出す。何が
良くて、何が悪いのか。その場にいる時に、その場
にいる人が判断するのは、本当に難しいことなのだと思う。
その企業家の名は、19世紀の半ばにパリに住んでい
たジャン＝フェリックス・バトゥロス氏。彼は1844年、
プレス機を使い、型に素材を流し込んでボタンを一度
に500個という大量生産可能な方法を発明し、パリに
工場を持っていた。1850年、彼がこの地をたまたま
訪れた時に、良い工場(1837年から続く陶器製造工場)
を見つけて翌年買収。手狭になったパリの自社工場を
ここに移した。

環境に配慮し、持続可能な事業をつくる

1996年、モザイク工場やモザイク博物館を所有す
るÉmaux de Briare (エモー・ドゥ・ブリアール)
社の経営危機を救ったのが、現在この企業などを
統括しているLes Jolies Céramiques (レ・ジョ
リ・セラミック)社の社長、ジャン＝クロード・ケ
ルグワット氏だ。

彼は、創業150年の伝統やすばらしい技術を残し
つつ、持続可能な事業とすべく、サステナブル改
革を行った。そもそもブリアールのタイルは、原材
料も燃料の調達も生産も地元で行い、焼く温度も
競合が1200度に対して、ここでは800度で焼くこ
とが可能。もともとサステナブルな生産が行われて
おり、福利厚生もしっかり整っていた。そのうえで
これからの時代に求められる要素を加えて行ったの
である。これまで廃棄していた欠けたタイルをリサ
イクルして、新しいタイルに生まれ変わらせたり、
すべての紙やダンボール、生産工程で使用する水
などもすべて再利用しているという。彼にこれから
の夢は?と聞いた。

「工場の敷地は約1,000㎡。自然いっぱい、鹿や
うさぎがいたり、鳥のさえずりやカエルの鳴き声も。



環境に優しい街で
あり、環境に優し
い会社であるべき
だと思うから、良
い商品をつくり、
時代に合ったサス
テナブルな取り組
みを進めていくよ」

1860年に機械の改良をし、1864年には一日800,000
個ものボタンの生産が可能となる。同じ技術によって、
パールの生産も始め、1867年にはパール生産技術の
特許も取得。この時代、従業員は700人になっていた。
ここでつくられる製品の色はとても美しく、ブリアール
は世界に「パールの街」として知られるようになった
そう。産業の発展のほか、1876年には、186の家庭、
800人の従業員のための住居や学校、公園、教会、病
院をつくるなど、この街の骨格をつくり、活性化させ
ることになる。だから、教会など、街のそこそこに、
見覚えのある彼の銅像やプレートが飾られていたのだ。
彼がこの工場を買った1851年の人口は3,477人。
1881年には5,590人に増加していく。まさにこの街は、
彼と彼の企業によって栄えることになる。
そして、その工場の敷地内にあったバトゥロス氏の住
まいに、今、私はいる。モザイク博物館だ。今も工場
は動いているが、現在はオートメーション化が進み、
従業員は50名。今もおフランスはもちろん、ヨーロッ
パ、アメリカ、ブラジル、カナダなど、世界中にブリアール
のモザイクは旅立っている。しかし、街にかつ
ての活気はない。仕事が減り、人が減る。街はそうや
って活気を失っていく。日本の地方都市でも同じことが
繰り返されている。企業と街がともに栄えるのは理想



だけれど、現代社会においては未来永劫、一つの企業、
産業に頼ることは、ある意味で危うさも伴う。移り変
わりが早いからだ。もちろん、答えは、まだない。

帰りの列車の時間だ。何しろ日に3~4本だから、乗
る電車も選ぶほどない。もう少しモザイクが見たかつ
たけれど、パリでもいたるところでブリアールのモザ
イクが使われた作品が見られるということなので、楽
しみに帰ることにする。旧デパート サマリテーヌの
外観(1区ボン・ヌフ右岸側)、サクレクール寺院(18
区モンマルトル)、デパート ボン・マルシェ(7区)。
今まで気がつかなかったけれど、次に見るときはきつ
と新しい景色に見えるのだろうか。モザイクのあの手触
りのある色彩、揺らす夢の後先を、もう一度確かめに
戻ろう。

Musée des Émaux et de la Mosaïque de Briare
4 rue des Vergers 45250 Briare
(パリ・ベルシー駅から車で約3時間)
Tel 02 38 31 20 51
無休
入館料: 大人 5.9€, 小人(6~14歳) 4.5€
※開館時間など詳細はウェブサイト参照
<http://musee-mosaïque.com/>